



## ～ 目次 ～

バリアフリー委員会の軌跡 / 宮町 悦信

CAR 部活動報告 / 三好 正孝

広報部活動報告 / 片山 喜博

2004 年の活動を振り返ってみると・・・ / 田村 綾耶

バリアフリー委員会の活動を振り返り 2005 / 竹田 圭吾

「第 2 4 回全国ろう学生の集い」に参加して / 平 留美

全国聾学生の集いに参加して / 白江 香澄

スポーツ大会を終えて / 青木 雄大

「障がい者スポーツを体験して」 / 上原 梢

大学生活一年目を振り返って / 島田 祐亮

バリアフリー委員会とすごした 1 年間 / 夕向 智博

バリアフリー委員会との 1 年間 / 沖野 友輔

2004 年度バリアフリー委員会の活動を振り返って / 長谷川 祐也

誰もが大切にされる大学を / 井上 寿枝

バリアフリー委員会にかかわって / 松本 賢彦

メンバーたちへのエール / 曲田 統

「バリアフリー委員会」と共に過ごして / 宮町 悦信

「貴重な思い出が貯まった我が母校・SGU」 / 工藤 努

新國（先生）コーナー

寄せ書き

メンバー表

編集後記

# バリアフリー委員会のこれまでの軌跡

2004年度学生代表

社会情報学部社会情報学科

3年 宮町 悦信



今となつては、100名近い学生が登録している「バリアフリー委員会」だが、設立当初から大  
学や教職員、もちろん学生の理解・協力を得られ  
ていたわけではなかった。簡単ではあるが、一通りの流れを説明しよう。

2000年に難聴学生が1人、法学部に入学された。入学時には、講義保障体制は整えられていなかったが、法学部の藤懸久明さんという法学部4年の学生が「情報保障ボランティア」という団体を設立し、本当に少数ではあるが、志ある学生を集め、講義保障に取り組んだ。全くゼロからのスタートだ、よほどの苦勞が襲い掛かったであろう。協力者が少ないことから、テイカーの配置を満足にできなかったり、大学から希望どおりの予算をつけてもらうことができなかったり：しかし、彼らは全くの無償という事にも関わらず、活動を続けていた。メンバー全員が、純粹なボランティア精神を持って活動に取り組んでいることから、不満や確執が生まれることもなく、日々活動していた。翌年、社会情報学部にも1人の難聴学生が入学された。活動に理解・協力を示す教職員が集まり、型を「バリアフリー委員会」と変え、新体制となった。活動内容は、設立当初と同じ、ノートテイクという方法での講義保障に取り組んでいた。

私が入学した年、2002年度。当時の学生代表は山口将さんという社

会情報学部4年の学生で、彼により今のパソコン要約筆記の基礎が作られ、実際に講義保障としての、パソコン要約筆記の活動が始まった。学生主体の活動ということなので、教職員は代表者ではなく、世話人という型で活動を指導、現在の世話人は社会情報学部教員の新國三千代先生だが、当時の世話人は法学部教員の南隅基秀先生。教職員の多大なる協力を受け、益々の発展を遂げようとしている、まさにスタートラインである。教職員のバックアップの成果があつてか、この年より、登録学生が少しずつ増え始めた。現リーダーの私や、当委員会の中核を担っている長谷川祐也が入会したのも、この年である。

2003年度、私がリーダー、そして長谷川祐也がサブリーダーとして、就任した年である。この年は、バリアフリー委員会としての活動が躍進した年である。きっかけは、バリアフリー委員会所属、本学人文学部教員高橋渉先生の声かけに始まる。「バリアフリー委員会とは、講義保障をするだけの団体ですか？難聴学生へのサポートだけをする団体のままでいいのですか？」もちろん、言い回しは違うが、このような内容を問われた。私は、ちはバリアフリー委員会の原点に戻らなければならぬと感じた。では、そもそもバリアフリーとは何か？「バリアフリー」という言葉。最近よく聞く言葉になってきたのでは？と思う。「バリアフリー」とは、障がいのある人が社会生活をしていく上で障壁（バリア）となるものを除去するという意味で使われる。ここで言うバリアとは、一般的に物理的・制度的・文化、情報面・意識上のバリアという4つを対象とし用いられている。

私達バリアフリー委員会では、これらのバリアが未だに、大学・社会に数え切れぬ程残っているがために、障がいを持った学生が情報を得ることや、社会参加することを阻まれているという現状を理性的に捉え、「バリア

なき社会」を指し、「障がいを持った学生と共に諸問題について取り組み・共に歩む」という考えを持った学生が集まり、日々活動すべきであると私は考える。

聴覚障がいを持った学生だけではなく、肢体不自由学生にも、その他これから、入学してくるかもしれない、様々な障がいを持った学生に対しての、入学してきた時のための準備・サポートを確立していかなければならない。今までの尊敬すべき先輩達が築き上げてきたこのバリアフリー委員会をまかさされたという、何らかの使命感を感じる程であった。この年から、思いつきではあったが、色々と手を伸ばし活動の幅を広めようと考えた。手話勉強会の開催、他大学の手話サークルとの連携・交流。アルミ缶・リングプル集め。(部としては3つ。交流部・学習部・CAR部を設立)だが、やはり何事もきちんと計画立てをしなければ、なかなか思い通りにはいかないもの。この年の活動を振り返ると、反省点ばかりが浮かんできて仕方がない。

たくさんの失敗を繰り返し、反省を重ねる事で積み上げてきた色々な経験を基に、今年の体制作りが昨年度末頃から、練り始めた。2004年度も03年度同様、私と長谷川ペアにより、活動が開始された。昨年度の反省点を生かすべく、5つの部を設置し、仕事を分担、それぞれに参加意識を持たせ、活動により積極的に参画してくる態度を育てようと考えた(交流部・編成部・手話学習部・広報部・CAR部)。

今年度からの新しい取り組みとしては、2つ。1つは広報部。毎月一回のBF委員会通信の発行と当委員会のHPの運営・更新を担当している。

HPのURLも以下に記しておく。「<http://www.sgu.ac.jp/bfc/>」是非見ていただきたい。表立った活動、学生や教職員の知られない面での活動が

多いため、BF委員会の活動を認知していただく、アピールする場を設けるため、HPの確立と「B.F.C.NEWS」という方法を考え、作成に至った。

もう1つは、積極的に肢体不自由学生とも関係を持ち、情報交換・収集を行い、交流を図っているという点。彼らに対しては、筆記代行、登下校車椅子補助(今冬期に実施を予定)、そして大学におけるハード面でのバリアを除去するため、意見・要望を集約し、大学に提出し、施設・設備の改善を求めるといふ活動を行っている。

ようやくそれぞれの活動が軌道に乗り始め、レールの上を走り始めた感を受けてはいるが、まだまだ問題は絶えず、これからもおそらくは消えることはないであろう。これからも、どんなことが起ころうとも対処できるように体制を整えると共に、新たな問題点を自ら探し、改善・解消していく、そんな団体を目指したいものだ。そのためには、皆さんの御理解・御協力がなければ、成せる事も非である。今後とも、是非、力を貸していただきたい!と願わずにはられない。



# CAR部活動報告

社会情報学部社会情報学科

1年 三好 正孝



平成17年度バリアフリー委員会、CAR部部长に任命された社会情報学部社会情報学科の三好正孝でございます。好きな食べ物は何もありません。

もちろんチャーターハンを作るのも大得意でございます。さて、本題にはいりましょう。私が部長に任命されたのは、忘れもしない10月の全体報告会のときでした。そのときまで全く聞かされてなかった私は、戸惑いながらもみんなの前で首を縦に振ることしかできなかったのです。前部長の竹田圭吾先輩の「してやったり」の表情が目には焼きついて、今でも忘れることができません。今思えば、いけない「プチドッキリ」でした。しかし、私は前から竹田先輩のことは本気で尊敬していたし、竹田先輩からの任命ということはすごく誇りに思えて、うれしくて頑張ろうという気持ちになりました。少しでも竹田先輩のような、周りの人や先輩からも愛されるのでっかい部長に近づければいいと思います。しかし、部長になってからというもの、私は部長の器ではないという事実が改めてわかってしまう日々でした。部長なのに仕事内容を部員の人たちのほうが覚えていたり、部長なのに自分のイメージチェンジを図った髪を染めたことで遅刻しちゃったり・・・迷惑かけっぱなしもよいところでした。いつか部員たちの部長辞めちまえ！という叫びがくるのではないかと怯える毎日でした。でも、そこはさすがバリアフリー委員会。みんなで助け合い、私のような頼りない男を理解し、CAR部を成り立たせてってくれています。私が部長だからといっ

て、私一人を特別扱いするわけじゃない、みんなでCAR部なのだ実感しました。もっと、私はCAR部に貢献して周りの人と助け合っていこうと決心しました。今までの活動を振り返って、前期は夏なので飲み物が売れやすく、缶の集まりも良くて活動に精が出ました。あと缶からアリもいっぱい出ました。しかし、前期に比べて冬のせいか缶が集まりにくくて、全然仕事がなかったです。そういう時は、自分から積極的に缶を集めに行くとか、いろいろ工夫すればよかったなと反省し、今後の課題になりました。これからはCAR部部长として、いろいろと新しい経験をしていくと思います。先輩もできるし、人間関係やさまざまな壁に真正面からぶつかっていいことと思います。今年の目標は、アルミ缶の総重量100kgを目指すことです。そして、何よりも仲間を大切にして、チャレンジ精神を忘れないことを目標に今年一年を活動していきたいと思っています。これからもCAR部をよろしくお願い致します。

## さあ、始めようか



# 広報部活動報告

人文学部英語英米文学科

2年 片山 喜博



「今よりもっと沢山の人にバリアフリー委員会の活動をよりよく知ってもらえるような、わかる広報活動をテーマに今年は一生涯活動します。」とバリアフリー委員会ウェブ広報部のコンテツツで宣言してしまっています。果たして活動できていたでしょうか。ウェブでこれが載っていることを初めて知ったという方ばかりだろうれいす。今でもそうなんですけれども、始めの頃からやりたいことが一杯ありました。ウェブに関してもそのやりたいことの一つで、もっともっと更新して充実したものにするつもりでしたが、それもかなわず。唯一メンバーの協力があつたおかげでバリアフリー通信を何とか出し続けられたことだけだったような気がしています。：が、一年間やらねばならないことはやっつつもりなのでよし！です。

さてさて、広報部の活動として2004年度の活動は主にバリアフリー通信の作成や、バリアフリー委員会ウェブの作成、更新やバリアフリー委員会主催イベントの広報用のビラ作りなどを行いました。広報部所属のメンバーには主に通信の記事を分担して担当してもらい通信の作成を行って来ました。

広報部が担当したバリアフリー通信は6月10日のNo.2から12月20日のNo.5まで、合計で4号を発行することができました。月に一度で毎月10日の発行という結構厳しい頻度での発行の予定でしたが、メンバーの

協力のおかげで、また、記事の作成に当たって広報部以外にもバリアフリーのメンバーやそれ以外の方々にも多くの方が協力してくださつたおかげで、日には守れずともほぼ月に一度の頻度を守って発行することができました。本当にありがとうございました！

2004年のホームページ作成・更新に関しては、中途半端な更新頻度になってしまいました。完全に止めてしまうことは無かつたのでとりあえず良かったと安心していいのではないかと思っています。新年度の広報部には全てを引き継ぐことになりませんが、今よりもずっと充実した更新度の高いホームページに作り上げてくれることを期待しています。また、ホームページだけではなく、バリアフリー通信やその他広報物に關しても2004年度の広報部で担当したものよりも更に立派なものを作り上げてくれることを期待しています！

## グレスジャイ



## 2004年の活動を

### 振り返ってみると……

人文学部臨床心理学科

2年 田村 綾耶



何とも波乱万丈だった感じがする。あ、でも……

色々ありすぎて思い出せないかも(汗)ノートテイクト前期は毎週、手話勉強会を担当してましたね！色々な人の協力で何とか最初の回を開催する事が出来て……あの時は本当に緊張してました。「人来てくれるのかなあ……」って。実際、始まってみるとビックリ！人数の多さに驚きました。「堂々としてる人」とか「出来る人」とか色々言われましたが、正直かなりテンヤワンヤだったんです。

キャリアアウーマンなんかではなく、私もみんなと同じ学生ですから(むしろダメダメ学生です)。でも、先輩方が凄く協力してくれて、更に私の初の後輩達が凄く盛り上げてくれて、昨年度の手話勉強会よりも凄くいい環境ができました。盛り上げすぎて、多少問題も見えた事もりましたが。人の話聞けますか？周りの様子を見ながら行動できてますか？基本的なマナー、自信ありますか？……これは、私達のこれからの課題としましょう(笑)そして何よりも、私が2004年に活動していた中で、凄く支えになっていたのは学習部の3人。かつち、たいちゃん、ヒロ。この3人の手話の成長振りには本当に驚きです。上手くなりましたあなあ、本当に(しみじみ)。

残念ながら、私は今、手話勉強会から離れています。一身上の都合もあり、手話勉強会に対する、また手話に対する色々な思いもあって。迷った

結果、距離を置くことに決めて、今距離を置いている状態です。私の場合「他の人に頼る・他の人と協力する」といった事があまり上手ではありません。実は責任者向きじゃないんです。そして、すっごくネガティブなんです。だから、手話勉強会で気になる点が出てくると、すぐに自分を責めてました。ぶつちやけ、周りに対する不満(というよりも不安)もありました。精神的に弱いといわれればそれまでですが、実際上にとって何かをしていくって言うのはものすごく辛い事です。宮町さんほど、逃げて長い間上に立っている人は凄いです。ホント、尊敬します。今、手話勉強会では学習部の3人が上に立って進めてくれますよね？彼女達、すごく大変な思いをしているはずですよ。夏の合宿の時も、私の代わりにも凄く頑張ってくれました。その影の努力をみなさん知ってますか？上に立っている彼女達を支えてあげてください。上に立っている人たちを支えるのは、その人達の下について活動している皆さんです。それは広報部でも、CAR部でも、この委員会全体でもいえることだと思います。……何を書きたいのか、分からなくなってしまうました。統一性のない文章で申し訳ない……。とにかく、2004年、色々あったもののバリアフリー委員会で見んなと一緒に手話が出来るよかったです！2005年もまた、どうぞよろしくお願います！



# バリアフリー委員会の

## 活動を振り返り2005

社会情報学部社会情報学科

2年 竹田 圭吾



そもそも僕がBF委員会に入ったきっかけは、新入生ガイダンスの時に配られた1枚の紙からでした。

そこには「講義の空き時間を利用してボランティアをしませんか？特別な技術は必要ありません」といった文句が書かれていて、「楽なボランティアで人のためになるのならいいんだ！」と、僕は勢いで応募用紙を教務課に提出したのでした。

そして、忘れた頃にある電話が鳴り響きました「今日の6時に説明会を行います！」

知らない人に囲まれた中、説明会での最初の一言に僕は驚きました。「ようこそバリアフリー委員会へ！」僕は自分の耳を疑いました。ノートテイカーだけをやるものと勘違いしていた僕が、言葉巧みにいつの間にか委員会に入ってしまったのは忘れられません。

バリアフリー委員会に入り2年、いつのまにやら僕は副リーダーを名乗っています。しかし、この2年間はいろいろな体験をさせて頂きました。こんな思い出もすべて「バリアフリー」があったおかげです。

工藤君をはじめとする皆との出会い。そして、京都の「ろう学生の集い」に行くための手話勉強ではみんなが一緒になって勉強してくれたから僕も頑張れました。

吉田さんから受け継いだCAR部は「いつになったら終わるんだ」などといわれていますが、毎週汚い缶を文句もいわず洗い、潰してくれるCAR部の人々を見たらそれだけで満足してしまいそうです。

特にCAR部に関しては今年新しく入った人たちを中心に活動してきました。来年のCAR部は「社情の若頭」三好君が大きな気持ちで引き受けてくれたので、実に助かりました。これからも目標は遠いですが皆で頑張っていきましょう！

僕も最初はノートテイクがバリアフリーの仕事なんだと思っていました。しかしバリアフリー委員会はノートテイクでろう者のサポートをするというだけの団体ではありません。学生の仲間、友達同士がお互いに助け合っていくという集まりです。

あ、  
もうページの終わりが近づいてきてしまいました。

人数も増え、これからもいろいろな事があるでしょうが、皆様よろしくお願いたします。

## 「第24回全国ろう学生の集い」

### に参加して

人文学部 人間科学科

1年 平留美



こんにちは！私は8月4日から8月8日までの4日間、京都で行われた「第24回全国ろう学生の集い」に参加してきました。とにかく楽

しかったし、自分にとってすごく良い経験になりました。一言でまとめると、暑くて熱くて厚かったです。まずは、やっぱり京都は暑かったです。

稚内育ちの私にとって今まで経験したことのない暑さでした。風はないし、湿度は高いし、サウナに入っているかのような感じで、こんな暑さの中で毎日過ごしている京都の人はすごいなあと思いました。次に、みんなすごく熱くなりました。みんな4日間という短い期間を思いきり楽しんでいたし、様々な企画に一生懸命で、スタッフさんや参加者みんなの頑張りに私も胸が熱くなりました。手話に熱い人も多くて、いっぱい刺激を受けました。そして最後に、全体を通して内容が厚く濃いものでした。一つ一つのどの企画も私にとって、すごく良い勉強・良い経験になったことは間違いありません。集いの4日間は忘れられない思い出になりました。

#### ❖ 体験学習について

私は2日目の体験学習で「バリアフリーユニバーサルデザイン」の講座に参加しました。内容としては、午前中に「京都市すまいの体験館」に行

き、実際にバリアフリーユニバーサルデザインのものを実験した後、午後からみんなで話し合いをするというものでした。体験館までは「車椅子体験」ということで、メンバーが順番に車椅子に乗りました。車椅子に乗ってみて、今まで気づかなかったことがたくさん見えてきて、やはり実際に体験するということはすごく大切だと思いました。最近はバリアフリー化が進められてきていると言われていますが、それでもまだまだ足りないなあと感じました。体験館では、今まで見たこともないような便利なものがたくさんありました。上下に動くキッチンや洗面台、トイレからお風呂まで移動できるリフトなどなど、驚きの連続でした。

車椅子体験も、ここでの体験もすごく良い経験になりましたが、私が一番印象に残っているのが午後からの話し合いです。バリアフリーについて、障がい者についてなど、みんな自分の意見をぶつけ合い話し合いました。そこで「ノーマライゼーション」という言葉を知りました。ノーマライゼーションとは、『障がい者は障がいを持っている人ではなく、様々なバリアによって行動や権利を妨げられている人』という考え方のことです。例えば、階段があってもエレベーターやエスカレーターがない場所では、「障がい者だから利用できない」と考えるのではなく、「バリアがある為に利用を拒まれるから障がい者になってしまう」と考えるということです。日本はこの考え方がまだまだ少ないらしいですが、この考えが広まることで社会はもっと変わることができると思いました。ここでバリアフリーユニバーサルデザインというものが重要になってきて、そしてこの言葉は、障がい者の人の為だけにあるのではないということも知りました。子どもでも大人でも老人でも、障がいを持っている人でも持っていない人でも、とにかく誰にでも使いやすいものだと思えてほしいと言われました。そして、こうしたものが増えている今、何のための誰のためのも



その手話いいわねえ♪



のなのかを考えることが大切だと私は思いました。点字ブロックの上になが立っていたり、自転車が置いてあるととても危険だし、駅にあるエレベーターに健常の人が乗っていて車椅子の人が乗れないなんてことがあつてはいけないと思います。この他にもいろいろなることを話し合いましたが、このバリアフリーユニバーサルデザインの体験学習に参加して一番思ったことは、誰にでも使いやすいものをもっとたくさん増えて、みんなが過ごしやすく、そして障がいを持っている人が障がいを感じない社会になつてほしいということです。



# 全国聾学生の集いに参加して

人文学部人間科学科1年

白江 香澄



「全国聾学生が集い」という、毎年全国各地から参加者が訪れる大会が、今年は8月5〜8日に行われました。北海道からは札幌学院大学のみならず、宮町さんと竹田さんと平さんと私の4人で参加してきました。今年は例年に比べ、人数が少なかつたらしく、学生と社会人の90名程の参加となりましたが、約1年かけて準備された内容は、とても素晴らしく、毎日私たちを驚かせてくれました。

私が、事前に考えていた「集い」に参加する目的の1つは、「自分の手話の力を試すこと」です。

私の周りにいる聾学生は、すでに私の手話の癖を見抜いてしまっているかもしれません。だから、京都で初めて会う人に、私の手話がどこまで通じるのか、どうしたら、もっとたくさんの人にわかってもらえる手話表現ができるのか、自分自身を試すことも手話を学んでいく上で、必要ではないかと考えました。

もう1の目的は、「地域による表現の違い（方言）を学ぶこと」です。聾の友達と話す時は、方言により通じないことも何度ありました。そんな時は互いに教え合い、みんな「関東では通じるが、関西からは通じない」など、方言の勉強会をすることもしばしばありました。

そして、私の1番の目的が、「聾者の世界と言われる、無音の空間を体験すること」でした。

実際、朝起きてから夜寝るまで、全てのコミュニケーションを手話で表現するという生活は、想像以上に頭と体力を使い、寝る前にはいつも疲労がたまっているのを感じました。しかし、寝る前でさえ、もっともっと手話を使っていたいと思ったし、1日中、手話の表現や読み取りに苦労し、努力した分、得たものが多かったのも事実です。

この4日間で、私の手話に対する向上心はますます強くなり、「これから、もっとたくさんの方と出会い、手話を通じて友達を増やしていきたいな」と思いました。短い期間で内容の濃い、貴重な体験ができて、本当に行って良かったと思います。

## ① 方言について

基本的には、みんな同じ表現なのですが、時々方言が入ると、「ちょっと待って！何それ？どういう意味？」と会話を中断して、みんな方言について話をしていました。関西在住の友達には、「北海道は1番方言がきつい」と言われ、方言を学びに行ったつもりが、逆に道外の人から指摘されることが多かったです。

例えば、道外で通じなかった表現は 感じ、漢字、感動、微妙、ごめんなさい、色、緑色、おじいちゃん、おばあちゃん、先生、高校、慣れる、恥ずかしい、失礼、ゆっくり などです。

私がいま見たことのない表現は 県、微妙、笑う、へえ、ファミリーマート、小学校、中学校、高校、たこ焼き（北海道では梅を表します）などです。

## ② 他大学の取り組みについて

私の想像以上に、国公立大学や有名私立大学が推薦入試により、嚶学生を受け入れていることが分かりました。しかし、やはり福祉の専門学科などがある私立大学に比べると、嚶者の人数も少ないし、テイカーの不足などもあり、講義保障の制度も十分とは言えない状態でした。

私の友達は、杉野服飾大学の1回生ですが、初めて嚶学生を受け入れた、その大学には講義保障など全くなく、手話サークルさえなかったというのです。そこで、彼女は大学側に自ら講義保障を頼み、テイカーをつけてもらい、手話サークルも自分で作ってしまったのです。今では、手話を用いた学園ドラマ「オレンジデイズ」の影響もあってか、サークルの人数もどんどん増えているらしいです。嚶学生1人の力で、彼女の周りにいる学生達や大学の意識をも変えることができるという事を知り、1人の力がこれほど偉大であることに、今さらながら気づかされました。

### ③ 体験学習（手話通訳士）について

私は4月から手話を学んできたのと同時に、ノートテイカーとしても活動してきました。そこで、せっかく手話を学んでいるのだから、いつかは手話通訳にも挑戦してみたいと思い、「手話通訳士」を選択しました。

京都で手話通訳をなさっている女性を講師に招いて、彼女の普段の仕事の内容、手話に関する資格について、地域による資格の違い、通訳士としてどういう点に気をつけているか、などの説明を受けました。そして、実際に交代で通訳を体験してみると、本当に難しく読み手のスピードはもちろん、限られた時間の中での自分のイメージ力（情報処理力）が重要だと気づきました。

### ④ 自分の手話力について

この集いに参加した目的でもある「自分の手話の力を試す」というのは、十分達成できたのではないかと思えます。「読み取れなかったら（伝わらなかったら）あきらめる」ということだけは絶対にしたくなかったので、わからないことがあった場合は、何度でも相手に尋ね、その度に新しい表現や相手の癖に慣れていくということを繰り返していました。今では、それが手話の練習方法では1番良いと思うので、もつというんな人と手話を使って話してみたいです。

京都では人に会う度に「嚶者かと思った」と言われました。それは嬉しい反面、自分の手話が速くて、癖の強いものだからではないかと思えます。相手が決まっただけで、会話をする場面では支障はないのですが、通訳をする場面では通用するとは限りません。たくさんの人に読み取ってもらえるような、きれいな手話表現を目指していきたいです。読み取り力としては、相手にもよるのですが、日毎に上手になっていくのが自分でもわかりました。手話というのは、TVや本でも勉強できますが、実際に使う相手は画面や紙の中にはいません。手話を本当に必要としているのは、私たちの近くにいる嚶者の方々なので、近くに嚶者がいる時は積極的に会話をし、その相手に合わせて手話を表現できるようになりたいと思います。

### ⑤ 感想

思っていたより、短い4日間でした。それは、充実した生活を送ったからであり、毎日が勉強だったからではないでしょうか。最初に抱えていた不安は初日で消え、手話だけをコミュニケーション方法とする「嚶

者の世界」を体験したことで、考えさせられたこともたくさんあります。この「集い」に参加して、初めて、なぜ私が聾者、難聴者として生れてこなかったのかと考えました。これは、健聴者の驕（おご）りかもしれないけれど、私が「集い」中、健聴者であることを恥じなかったことは「度」ありませんでした。それほど、「集い」では健聴者が浮いているように見えたし、聾者と聾者の心の繋がりが強いいため、健聴者が「聾者の世界」に入っていくことは、決して簡単なことではありませんでした。

逆の立場では、「聾者は、いつも疎外感を感じている」と聾の友達が言っていました。今は、だいぶ世の中が変わってきて、聾者や手話への偏見もなくなってきましたが、それでも、聾者個人の心の中には、まだ健聴者と聾者を区別している「高い壁」があるのが現状です。聾者の中には常に「自分と健聴者は違う」と感じている人も多いようで、「聾者は健聴者と違い、表情も付けて話すから、周りで見ても聾者は浮いているように見える」と彼女は表情を変えずに話しており、「健聴の友達といっても本心では話せないし、手話を覚えて欲しいけど、自分からはとても言い出せない」と言われ、私は初めて聾者の本心に触れた気がしました。

別な聾の友達にローソンという手話をした時、工藤さんから教えてもらった「聾+損」を表現しました。すると彼女に「違うよ、聾+尊（敬）だよ。聾は損じゃない！」と教えられました。後から聞いた話によると、最初は「尊（敬）」が一般的でしたが、面倒くさいという理由で、簡単な「損」の表現に変えてしまった聾者がいるらしいです。そんなことも知らず、彼女の前で、「損」という表現を使ってしまった自分を、とても恥ずかしく思います。

聾者は、自分が聾ということに強く誇りを持っています。そして、聾

者は誇りを持つべきだと私は思います。もし、自分が障がいを持つ者だったら、こんなに強く生きていけるでしょうか？私には答える権利はないけれど、健聴者も聾者も自分が強くいたいと思うのは、誰しも同じです。障がいを障がいと思わせないほど強く生きる聾者を、私は心から尊敬します。



## 「北海道重複障がい教育研究大会」

### に参加して

経済学部経済学科

3年 安田 匡伸



僕は、昨年の7月10・11日に旭川で行われた北海道重複障がい教育研究大会というものに参加しました。これは特殊教育の現場での日頃の実践を発表する研究会です。僕は今までこういったものに参加したことはなく、特殊教育の場がどういったものなのかは全く知りませんでした。だからこの研究会では、それらがどういったところなのかというようすを知ることが、自分の中で1番の目的だったと言えます。

実際に参加してみて、これはどんな学校であっても変わらないことですが、教師の気付きというものが持つ重要性を改めて実感し、そしてそれを実践していることが率直にすごい事だと感じました。子どもの様々な行動や反応を捉え、どうしてそのような行動等をとっているのか、その子どもがどのようなことを感じているのかを読み取ろうとしている姿がとても鮮明に現れていました。何をしたいのか、どんな関係を築いていきたいのかという目的をもって取り組んでいて、それは関わっていく上で絶対に必要な部分だし、課題を考える上でもなくてはならないものではないかと思いました。

また、一人一人の子どもに合った教材を工夫することによって、子ども

達の精神的にも社会的にも成長を促せるような関わり方をしていました。事例の中にも、それぞれの先生が電池の型はめ、芝刈り機のビデオ、リベツトさし、おもちゃの車を動かしたり、積み木やつまみ学習などといった様々な教材を用いていました。これらの教材での学習を通して、できない部分ではできるように教材や声掛けに工夫・改善をすることによって教材の効果を高めるよう努力されていて、実際にこれらの学習を通して子ども自身が、それまではできなかった日常生活での動作ができるようになったり、周囲への反応に変化があったりと、確実に学習することによって成長につながっていると言えます。

個人的に僕がこの研究会において、1番印象に残ったのが、「はめ板」という教材の存在でした。はめ板とは、丸や三角といった形の板を、同じ形の枠にはめるといった教材のことです。はめ板という言葉が頻繁に出てきて、これは他の教材に比べてどうしてこんなに重要視されているのかと疑問に思いました。しかし話を聞いていくと、とても奥深いものだと感じました。教師にとっては、はめ板を通じることによって子どもがどのように工夫し、関わろうとしているかを教わる場になるのです。また、子どもは行動によって外界になにかを作っており、それを整理してあげることのできる方法の1つが、はめ板というものだということも聞きました。

子ども達は外に関わる力を求めているも、実際にその力を出し切れていないという状態にあります。そこではめ板などの「型はめ」によって体験した、ぴたつとはまる感覚が生かされ、それを子ども達の生きる力にどう変えていくかを、様々な教材を使った学習へと発展させて具現化していくうとしているのではないのでしょうか。そういった意味では、はめ板というもののはすべての基礎になっている部分ではないのかと自分なりに感じました。

2日間の研究会を通して、様々な教材を用いた学習やアプローチによって、子ども達の「生きていくための力」を育んでいくという目的をはっきりと理解できたような気がします。

また研究会だけでなく、一緒に参加したBF委員会のメンバーとの親睦も深めることができ、とても有意義な楽しい2日間を過ごすことができました。このような機会を与えてもらったことに本当に感謝し、また次回も参加することができれば、今回よりもさらに自分にとってプラスになるものを得て、伝えていきたいと思います。



# スポーツ大会を終えて

社会情報学部社会情報学科

1年 青木 雄大



夏と冬に行われたスポーツ大会、夏は参加者として、冬はスポーツ大会実行委員として活動させていたのですが、他の大学生と仲良くなったり、普段あまり接していなかった友達とチームを組んだりと、いろいろな場面で交流を深めることができました。夏のときは、バリアフリー委員会に入って初めてのイベントだったし、冬のときは、スポーツ大会実行委員として活動させていただいて、どちらの大会とも不安でいっぱいだったのですが、なにより僕自身とても楽しかったし、参加した人たちがみんながそう思っていたと思います。

夏の大会は、とても天気の良い日で、体育館の中もみんなの熱気で暑かったのですが、みんなですポーツをして、交流して、良い汗をかいて、とても充実した時間だったと思います。その時は実行委員ではなかったのですが、実行委員の方々のスムーズな司会で、みんな迷うことなく次の種目に進むことができましたし、他の大学生との交流も不安だったのですが、みんなとてもいい人たちばかりで、試合が終わった後もキチツと挨拶をして、勝っても負けてもすっきりした気分になりました。僕にとって初めての他の大学生との交流だったので、そのスポーツ大会の時は、勝敗よりももっとおおきなものを得ることができました。

冬の大会の時は、僕は実行委員で、前々からスポーツ大会の計画をたてたり、チラシを配って呼びかけるなどの活動をしたりして事前に準備をし

ていました。今回のスポーツ大会は前回の夏の大会の時とは違い、講師の方々に学校に招いて、フライングディスクとゴロ野球という種目をするという事で、両方ともあまり聞きなれない単語で不安だったのですが、大会当日は堅苦しい雰囲気もなく、講師の方々のとてもわかりやすい教え方のおかげで、スムーズに、楽しく種目に参加することができました。他の大学生や、地域の方ともスポーツを通じて交流することができました。また、友達同士で同じ「シャツ」にそろえてきたりするなどして、とても和やかな雰囲気で種目を進めることができましたし、「障がい者の方々もみんな楽しんでる大会」という目標だったので、みんなが楽しそうに種目をしたり交流している姿を見て、実行委員になってこの大会を運営することができて本当に良かったと思います。

今年のスポーツ大会も前回と同じように和やかな雰囲気です、そして前回以上にみんなが楽しめて、心に残るスポーツ大会にすることができたらいいなあと思います。

